

外国語の歌詞による歌曲の日本語訳演奏についての一考察と実践例

クルターグ・ジェルジュ作曲《言葉とはなに》を扱って

司会進行・発表者：降 矢 美彌子 (宮城教育大学)

目 黒 稚 子 (会津若松市立荒館小学校)

竜 田 晴 美 (千葉県立四街道高等学校)

岩 田 愛 子 (実践女子学園中学校高等学校)

はじめに

本共同企画の発表内容は、以下の5点とする。

1. 《言葉とはなに》の作曲者クルターグ・ジェルジュ (Kurtág György 1926-)¹⁾について、2. クルターグの代表作の一つである『遊び ピアノのために (Játékok zongorára)』(以下『遊び』と表記する。)の解説と子どもへの指導、3. 《言葉とはなに》の日本語歌詞作成に関わって、外国の歌の日本へのアダプティションの問題点について、4. 《言葉とはなに》の解説と日本語歌詞作成について、5. 福島コダイ合唱団と降矢美彌子による《言葉とはなに》ハンガリー語歌詞・日本語歌詞による演奏。本報告は、5に「おわりに」を加える。

1. クルターグ・ジェルジュについて

クルターグは、1926年現在はルーマニア領であるルゴシュで生まれ、今日最も活躍するハンガリーの作曲家である。ピアニストとしての演奏も多く、11年9月パリ・オペラ座、12年パリ・シティ・ホール、本年12月ロンドンでリサイタルが予定されている。近年、クルターグは、最後の作品、サミュエル・ベケット (Samuel Beckett 1906-1989) によるオペラの作曲に取り組んでいる。クルターグは、極限にま

で切り詰められた音と沈黙を大切に作曲することで知られる。そのスタイルから俳句に通じると言われることもある。資料に、最も新しい経歴を提供した。

2. 『遊び』の解説と子どもへの指導

1) クルターグの代表作『遊び』の解説

『遊び』は、全8巻からなるピアノ小品集で、4巻は連弾や2台のピアノのための作品、5巻以降は作曲者の友人たちへの手紙のように書かれた小品集である。原語 (Játékok) はハンガリー語で、あそぶ、プレイするなど、英語の play と同義の単語である。1979年に作曲された第1巻には、手のひら弾き、肘弾きなど新しいピアノ奏法とそれらを表す図形楽譜が提案され、初歩のピアノ学習者への20世紀後半の最も優れたピアノ作品集の一つとされる。『ピアノ・カリキュラム』を著したテーク・マリアンヌ (Teöke Marianne 1929-2011) が協働者である。

クルターグは、前書きに次のように書いている。

「この『遊び』は、もどかしげに鍵盤を探したり、リズムを数えながらピアノを弾かせるというのではなく、ピアノを学ぶ第一歩から、大胆に音を出し、全鍵盤の上を走りまわるようにして、ピアノを弾く喜びや動くことの楽しさを味わうことから始めよう

1) ハンガリーの作曲家。リスト音楽大学卒。代表作：《カフカ断章》Op. 24、《石碑》Op. 33、《ヴァイオリン、ヴィオラとオーケストラのためのコンチェルト》Op. 42、《ヒパルテフィータ ヴァイオリン・ソロのための》Op. 43 など。ジューゼッペ音楽賞、ジョン・ケージ賞、グロマイヤー賞 (作曲部門) など多くの音楽賞を受賞し、21世紀前半の最も活躍する作曲家として、ヨーロッパやアメリカの各地で演奏会が重ねられている。

としている。演奏とは、まさに遊びである。しかし、そのことは演奏者に際限ない自由と自発性を要求するのである。以下省略（降矢訳）」

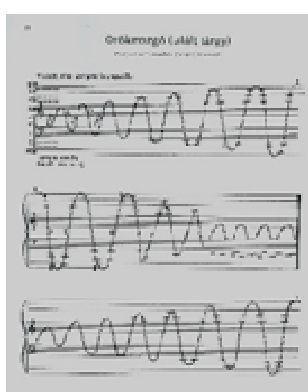
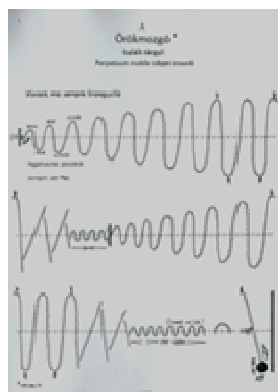
第1巻1番の《無窮動》は、初めてピアノを学ぶ子どもが、最初に弾く作品で、前書きにあるようにピアノを学ぶ第一歩から、大胆に音を出し、全鍵盤の上を走りまわるグリッサンドでできている。と同時に、『遊び』第1巻25ページの最終曲でもある。クルターグは、最終曲のこの作品を自身のリサイタルで度々演奏する。1ページの《無窮動》と25ページの《無窮動》との違いは、最終曲では、音高が厳密に規定されている点のみにある。また、『遊び』第1巻の作品集のモットーでもある《花、人…》というタイトルの3番を、リサイタルの最初に弾く。クルターグは、作品において子どもと大人、アマチュアとプロフェッショナルを区別しない。

初心者もプロのピアニストも、1巻の1・2番で、ピアノに向かったその瞬間からグリッサンドや手のひら弾きのクラスターを使って全鍵盤を使って音楽創造する。しかし、クルターグはスタートからピアノ演奏に最も重要であると考え以下の課題を作品に含めている。

譜例1

1番《無窮動》p. 1

最終曲《無窮動》p.25

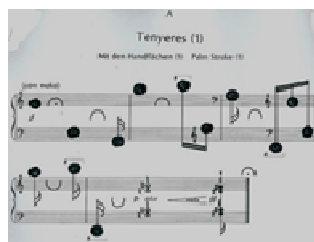


出典：Kurtág, György (1979). *Játékok 1 zongorára*, Teőke Marianne (Pedagogical Collaborator), Budapest: Editio Musica Budapest. p. 1, p.25.

1番：1．肩や腕の力を抜いて、柔軟に両腕を動かすこと、2．黒鍵と白鍵のグリッサンドを用いることで、音色の重要性に気付くこと、3．音の強弱は、弾く人の内的な変化を要求すること、4．休符＝間の深い意味。2番：1．キャラクターが決定的であること、2．音と休符の意味、3．音楽の構造の理解（2番では、問いと答え、1対1、2対3、4対2、コーダの構造）、4．ピアノでは演奏不可能な長い1音のクレッシェンドから、強弱の内的な変化の学習、5．和音の弾き方の基礎。

譜例2 2番《手のひらで(1)》p. 2

幼児 初めてのピアノ
村山智 (0歳11ヶ月)



出典：Kurtág, György (1979). *Játékok 1 zongorára*, Teőke Marianne (Pedagogical Collaborator), Budapest: Editio Musica Budapest. p. 2.

写真掲載許諾
済

なお、手のひら弾きは、幼児が初めてピアノに触れた際、最初に行う自然な弾き方である。写真は0歳11カ月の幼児が、初めてピアノに触れた際行った手のひら弾きである。グリッサンドも手のひら弾きも子どもが最初にピアノに向かって行う弾き方である。クルターグは、それらを作品に取り入れた。

以上のように『遊び』は、それまでの初心者のためのピアノ学習のテキストとは全く異なった概念で作曲され、クルターグの哲学が具現されている。

では「現代音楽」というカテゴリーに入れられるクルターグの音楽は、日本の子どもたちにどのように受け入れられるだろうか。共同企画プロジェクトでは、クルターグの『遊び』1番や、本日演奏する《言葉とはなに》を用いた授業の実践を行った。

(降矢美彌子)

2) 子どもへの指導

(1) 小学校におけるクルターグの授業

題材名：「現代音楽への心の扉を開こう」

対象：福島県会津若松市立荒館小学校3年生21人

授業者：目黒稚子

授業計画：2時間。クルターグの『遊び』より1番

《無窮動》の実技体験，クルターグ演奏の
《無窮動》と《言葉とはなに》の鑑賞

1時間目にグリッサンドについて学び，《無窮動》を音の上向下向，白鍵黒鍵の音色の違い，グリッサンドの音程の幅の広がり意識して，最初の部分をエアー・ピアノ（指でピアノを弾く真似をする）で弾く体験をした。その後，実際にピアノを弾くと，最初の瞬間から，生き生きと目を輝かせて弾いた。その体験のうえに，クルターグが演奏する《無窮動》を鑑賞し，全身で音色や休符をよく聴くことができた。

2時間目には《言葉とはなに》の一部分を，言葉の意味を込めてハンガリー語で歌う体験をしてから鑑賞した。子ども達は息をのんで，食い入るように演奏を見つめ，ため息も出るほどだった。

初めて聴く耳慣れない現代音楽を，音楽の要素を大事にしたエアー・ピアノの体験や，ハンガリー語の言葉の意味を大事にしながらかう体験を通して，小学生なりに深く受け止めて鑑賞することができた。現代を生きる子ども達にとって，クルターグとの出逢いは，貴重な心の糧となるのではないかと考える。

（目黒稚子）

(2) 高等学校におけるクルターグの授業

題材名：「現代音楽への心の扉を開こう」

対象：千葉県立四街道高等学校1 - 3年生

授業者：竜田晴美

授業計画：9月 - 12月。クルターグの『遊び』より

1番《無窮動》の実技体験，クルターグ演

奏の《無窮動》と《言葉とはなに》の鑑賞

《無窮動》では，エアー・ピアノで音のイメージ作りを試みた。生徒は，考えながら身体を伸び伸びと使い，仲間と共有する喜びも味わいながら表現した。エアーから本物のピアノに向かう生徒達は，内面から表現への欲求が溢れ出るようで，本当に嬉しそうだった。楽譜を読む生徒達の心の目を大切にし，作曲家とその時代背景にも目を向けさせた。

3年生は，静かなエアー・ピアノで「repet. ad lib.」の部分や長い沈黙の意味を考え，内唱して音色に対するイメージを膨らませた。クルターグの音楽は，今の生徒が特に必要とする内なる音や声を感じ，聴き，意味を考えて表現に結びつけることを自然に実現する。生徒達は，休み時間に，曲について自発的に話し合ったり，弾いたり，わからない楽語を調べたりし，最後に無窮動コンサートを開いた。

《言葉とはなに》の鑑賞では，失語症と闘いながら人生を深く生きる歌手モニョーク・イルディコー (Monyók Ildikó 1948 - 2012)²⁾を知り，食い入るように聴いていた生徒達の感性が柔らかく拓かれたと感じた。今後は，他の現代音楽の世界にも生徒達の心を広げていきたい。

（竜田晴美）

3. 外国の歌の日本へのアダプティションの問題点について

本日のテーマであるクルターグ作曲《言葉とはなに》を用いた日本語歌詞作成に関わって，日本で行われてきた外国の歌のアダプティションにおける問題について，3曲を例に挙げて考察を行う。

日本では外国の歌を日本の歌としてアダプティションする場合，リズム，メロディー，歌詞の内容を原曲とは異なるものに変えてきた歴史がある。

1) (Comin' thro' the rye) と日本の唱歌(故郷の空)

譜例3・4に示したように，最も重要なリズムで

2) 役者・歌手。《Mi is a szó》を初演以来各国で演奏し，感動を与えた。

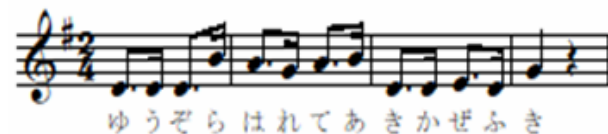
ある ♪ ♪ ♪ ♪ の変更が7カ所ある。このリズムは、作品のキャラクターそのものである。このリズムの変更は、作品のキャラクターを変える決定的な変更である。歌詞についても、スコットランド民謡「ライ麦畑で出会ったらキスをする」という軽い恋の内容の原曲が「秋の夕暮に故郷を離れて暮らす人がふるさとを懐かしみ物思いにふける」という全く違う内容に変えられている。この作品の場合、音楽の内容も原曲が完全に変更されている例である。

譜例3 《Comin' thro' the rye》



出典:T.P.Ratcliff (compiled and edited) (1972). *News-chronicle song book*, London: News-chronicle. p.23.

譜例4 《故郷の空》



出典: 安田寛(監修) (2000). 『原典による近代唱歌集成 - 誕生・変遷・伝播 - 演奏用楽譜』, 東京: ビクターエンターテイメント. p.11.

2) 《I've been working on the railroad》と 《線路はつづくよ どこまでも》

原曲は、アメリカ民謡「僕は線路で働いている、まる一日中」という過酷な状況での労働歌であった。日本では、「線路は続くよ、楽しい旅の夢」という明るい内容に変えられて歌われていて、原曲が過酷な状況下での労働歌であることを知る人はほとんどいない。この作品は、内容やバックグラウンドの変更と言えよう。なお、リズムとメロディーには、本質的な変更ではないと言えるが、6・7小節と11・14小節に訳詞の関係で若干の変更がある。

3) 《Do- Re- Mi》と《ドレミの歌》

映画《サウンド オブ ミュージック》の挿入歌の《ドレミの歌》は、教育出版小学校3年生の教科書に載っているが平成23年度改定版以前の楽譜は、臨時記号のついた3つの音が八長調の幹音に変更されていた。現在は、原曲表記になっている。日本で最もポピュラーな歌ともいえる《ドレミの歌》は、歌詞の意図と内容が原曲とは全く違う。原曲では階名のシラブルに添った歌詞であるのに対し、日本語歌詞では「ドはドーナツのド、レはレモンのレ」と歌いながらミの音にド、ファの音にレという言葉をあてはめていて、原曲の階名を学ぶ歌ではなくなっている。

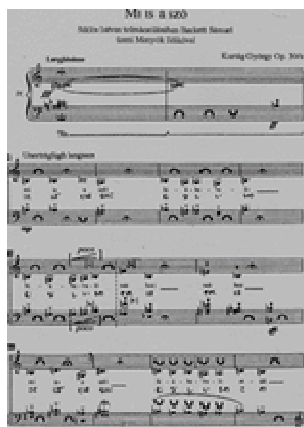
日本語は母音と子音で音節を形成するが、ヨーロッパの言語では、1つの母音に複数の子音がついて1単語を形成する特徴があり、日本語歌詞の作成の際、変更を余儀なくされる場合もあったであろう。しかし、この3例からも明らかなように、日本における外国の歌のアダプティションには、リズム、メロディー、歌詞の内容に原曲を生かすという視点は弱かったと思われる。すでに日本語の歌詞で親しまれてきた曲は、作り直す必要はないかもしれない。しかし、今後は、原曲を歌っている人々に、それと認識できぬ程、変更を加えるのではなく、なるべく原曲を変更しないで子どもに手渡すという視点が望まれると考える。(岩田愛子)

4. クルターグ作曲《言葉とはなに》の解説 と日本語歌詞作成について

1) 《言葉とはなに》の解説

原詩は、晩年、失語症で苦しんだアイルランド出身、フランスで活躍した20世紀を代表する詩人・戯曲家サミュエル・ベケットの英語とフランス語による最晩年の言葉の断片のような詩である。クルターグは、ベケットの詩を彼の死後、シクローシュ・イシュトヴァ

譜例5 《言葉とはなに》 p. 1



楽譜 高橋悠治作成 降矢美彌子訳詞

愚かしさ、益のない、虚しさをどもるように執拗に繰り返す。福島コダーイ合唱団は、2012年3月末、ハンガリーのコダーイ記念博物館とバルトーク記念館でのリサイタルで合唱による初演を行った(ピアノ・指揮：降矢美彌子)。ハンガリーでは、2011年3.11の東日本大震災の地震・津波・原発事故・風評被害で苦しんだ福島の言葉で語り尽くせぬ思いを込めて演奏し、深い感動を与えた。

2) 日本語歌詞作成について

日本語の歌詞を作成する場合、クルターグが原語として扱ったハンガリー語訳詩で何度も繰り返される単語をいかすという視点に立った。ハンガリー語と日本語には、発音はもとより、シラブル数、語順に大きな違いがあり、原文の意味をたがえずに、日本語歌詞を作成するのは困難を極める。例えば、キーワードの、*word*(英語)、*Szó*(ハンガリー語)「言葉」という単語は、英語とハンガリー語では、1シラブル、日本語は、コトバと3シラブルである。

最初の日本語歌詞作成は、2011年2月、日本初演に取り組んだ高橋悠治による。高橋は、ベケットの英語とフランス語テキスト参照し、見事な歌詞を作成した。降矢は、高橋の歌詞を参考にしながら、ベケットではなく、歌詞となっているハンガリー語の訳詞で繰り返されるキーワードを必ず訳すというこ

う(Siklós István 1936-)が翻訳したハンガリー語の訳詞と、交通事故で7年間失語症に苦しんでいたモニョーク・イルディコーにインスピレーションを得てこの作品を作曲した。ベケットは、言葉というもののもつ、

とを原則とした。表1に4種の言語の歌詞をまとめる。なお、高橋の初演から、エピローグとして、クルターグ作曲《花、人 .. ミヤコヘ》が奏される。

この作品の重要なキーワードの、*What is the word*(英語)、*Mi is a szó*(ハンガリー語)「言葉とはなに」で9回、続く *folly*(英語)、*hiábavaló*(ハンガリー語)「むなしいもの」は13回繰り返される。*What*(英語)、*mi*(ハンガリー語)「何」は31回繰り返される。

言葉で伝えきれぬ虚しさ、苦しみは、形が違ってても2011年3.11の東日本大震災と続く東京電力第一発電所による史上2回目の最悪な原発事故下の福島に2年半余暮らす福島コダーイ合唱団の思いに共通するものがある。原発事故は収束せず、放射能汚染水は漏れ続けて海に流出しており、現在も問題は深刻である。除染は進まず、約15万人余の避難者は、家族がバラバラに分断され疲弊している。言葉では表現し尽せない福島の苦しみを伝えたいという思いが、筆者の日本語歌詞作成の動機である。クルターグは原発事故当初から福島の惨事に深い関心と共感をよせ、演奏にあたって多くの指導助言を与えた。

5. おわりに

当日は、福島コダーイ合唱団と降矢(指揮・ピアノ)によってハンガリー語の原曲と降矢訳詞が歌われた。両言語による当日演奏のYou-Tube アドレスは 以下である。 <http://youtu.be/iDzqqGSPLVI>, <http://www.youtube.com/watch?v=GivgJedh1jU>

3章で明らかにしたように、これまで日本では、外国の歌をメロディーやリズム、内容も原曲と全く異なったものに変えて歌ってきた歴史がある。クルターグ作曲《言葉とはなに》は、キーワードの文や単語が何度も繰り返されるという特異な作品ではあるが、原語を生かして、2種の日本語歌詞を作成する可能性のあることを示し、原語を生かす作詞が可

能であるという一例となろう。今後、外国の作品に日本語の歌詞を作る際には、子どもたちのために、少なくともその歌を歌っている外国の人々が、原曲だと認識できない程にリズムやメロディーや内容を

変更しないことが求められると考える。譜例等使用を許可して下さった EMB, 高橋悠治氏に感謝する。
整理：山崎 純子(二本松市立油井小学校)
文責：降矢美彌子(宮城教育大学)

表1 クルターグ・ジェルジュ作曲《言葉とはなに》ベケットの英語による原詩と翻訳された歌詞³⁾

What is the word サミュエル・ベケット詩 (英語) (1989)	Mi is a szó シクローシュ・イシュトヴァーン訳 (ハンガリー語) (1990/91)	何と言うか 高橋悠治訳詞 (2011)	言葉とはなに 降矢美彌子訳詞 (2013)
folly - folly for to - for to -	mi is a szó - hiábavaló - hiábavaló nak hoz - nak hoz -	何と言うか - 狂おしさ - 狂おしさ それは - それは -	言葉とはなに - むなししもの - むなししもの それは - それは -
what is the word - folly from this - all this - folly from all this - given - folly given all this - seeing - folly seeing all this - this -	mi is a szó - hiábavaló ettől - mindettől - adott - hiábavaló adva mindettől - láttnivaló - hiábavaló látni mindezt - ezt -	何と言うか - 狂おしさ あの - みんなの - せいで - 狂おしさ あれらのせい - 見てみれば - 狂おしさ あれを見て - あれ -	言葉とはなに - むなししもの この - みんなの - 与えた - むなししもの これらの せい - 見てみれば - むなししもの これを 見て - これ -
what is the word - this this - this this here - all this this here - folly given all this - seeing - folly seeing all this this here - for to -	mi is a szó - ez ez - ez ez itt - mindez ez itt - hiábavaló adva mindettől - látva - hiábavaló látni mindezt itt - nak hoz -	何と言うか - この - こいつ - みんな こいつら - 狂おしさ あれらみんなの せい - 狂おしさ 見れば こいつら - それは -	言葉とはなに - これ これ - ここの - みんな この - 狂おしさ あれら みんな - 見る - むなししもの 見れば こいつら - それは -
what is the word - see - glimpse - seem to glimpse - need to seem to glimpse - folly for to need to seem to glimpse - what -	mi is a szó - látni - pillantani - pillantani tűnni - szükség pillantani tűnni - hiábavaló szükség pillantani tűnni - mi -	何と言うか - 見る - かいま見る - かいま見るつもり - きっとかいま見るつもり - 狂おしさ きっと かいま見るつもり - なに -	言葉とはなに - 見る - かいま見る - かいま見る 消える - 必要 かいま見る 消える - かいま見る 消える - なに -
what is the word - and where - folly for to need to seem to glimpse what where - where -	mi is a szó - és hol - hiábavaló nak hoz szükség pillantani tűnni mi hol - hol -	何と言うか - どこか - 狂おしさ それはきっと かいま見るつもり なにか どこ -	言葉とはなに - どこか - むなししもの それは 必要 かいま見る 消える なにか どこ -
what is the word - there - over there - away over there - afar - afar away over there - afaint - afaint afar away over there what - what -	mi is a szó - ott - odaát - odébb odaát - távol - távol odébb odaát - eltűnő - eltűnő távol odébb odaát mi - mi -	何と言うか - あっち - あそこ - あっちあそこ - 遠く - 遠くあっちあそこ - かすかに - かすかに遠くあっち あそこ なに - なに -	言葉とはなに - あっち - あそこ - あっち あそこ - 遠く - 遠く あっち あそこ - かすかに - かすかに 遠く あっち あそこ なに - なに -
what is the word - seeing all this - all this this - all this this here - folly for to see what - glimpse - seem to glimpse - need to seem to glimpse - afaint afar away over there what - folly for to need to seem to glimpse faint afar away over there what - what -	mi is a szó - látni mindezt - mind-ezt ezt - mind-ezt ezt itt - hiábavaló nak hoz látni mi - pillantani - pillantani tűnni - szükség pillantani tűnni - eltűnő távol odébb odaát mi - hiábavaló nak hoz szükség pillantani tűnni eltűnő távol odébb odaát mi - mi -	何と言うか - 見ればみんな - こいつら - みんなこいつら - 狂おしさ なにを見ても - かいま見る - かいま見るつもり - きっとかいま見るつもり - かすかに遠くあっち あそこ なに - 狂おしさ それはきっと かいま見るつもり かすかに 遠く あっちあそこ なに - なに -	言葉とはなに - 見れば みんな - こいつら - みんな こいつら - むなししもの なにを 見ても - かいま見る - かいま見る 消える - 必要 かいま見る 消える - かすかに 遠く あっち あそこ なに - むなししもの それは 必要 かいま見る 消える かすかに 遠く あっち あそこ なに - なに -
what is the word - what is the word	mi is a szó - mi is a szó	何と言うか - 何と言うか	言葉とはなに - 言葉とはなに

出典：Partitura, Kurtág Samuel Beckett. *What is the word* op.30b (Siklós István tolmácsolásában Beckett Sámuel üzeni Monyók Ildikóval), EMB.
歌詞 高橋悠治

3) Universal Music Publishing Editio Musica Budapest KFT, 高橋悠治からの掲載許諾済み。